神様の罰し方

早いもので、レントに入ってからおよそ一月が経過しようとしています。このイエス様の御受難を偲ぶシーズン、私は改めてイエス様の十字架の出来事について考え続けていました。そして、イエス様の十字架を見つめれば見つめるほど、私たち人間の罪が見えてくると同時に神様の愛も見えてくることを思わされました。なので今日はイエス様の十字架の場面を取り上げて、そこにどのような神様の愛が顕わにされているか、そしてその愛は私たちにどのような悔い改めを求めているか、しっかりと考えていきたいと願います。

さて、今日取り上げさせていただきました聖書個所はマタイによる福音書27：45～56です。十字架につけられたイエス様が息を引き取られる場面。マタイによる福音書にはあまりはっきりと記されていないのですが、マルコによる福音書 15：25 には、「イエスを十字架につけたのは、午前九時であった」と記されています。それから実に6時間、イエス様は十字架の上で苦しまれ、とうとう午後の3時に息を引き取られたのです。マタイによる福音書27：46には、その時イエス様が「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫ばれたことが記されています。

ここから伺えるのは、イエス様が神様から関係を断ち切られてしまう裁きとしての死を死んでくださったということに他なりません。ここで死というものについて考えてみれば、それは誰も経験したことが無い、その意味では私たちの理解の範疇を大きく超えた領域の出来事ですから、多くの者が自分の存在が無くなってしまうのではないかとか、皆と永遠に会うことができなくなってしまうのではないかとかいったように、様々な恐れをそこに感じます。しかし、聖書によれば、死というものの恐ろしさは、本来そんな生易しいものでは決してないのです。

ローマの信徒への手紙5：12には、このように記されています。「一人の人によって

罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。」この御言葉から窺えるように、聖書では、死はアダムが犯した人間の原罪の結果、私たちすべての人間にもたらされた神様の裁き、呪いであるとされています。アダムは罪を犯した、その子孫である人間はすべて本来的に神様に背いてしまう罪を持った存在（罪人）であり、その裁きとして人間は死に、神様から関係を断ち切られてしまう。考えてみれば、こんなに恐ろしいことはありません。

実は死の本当の苦しみは、体が痛くて怖いとか、死んだらどうなるか分からないから不安だというようなことでは決してないのです。私たちが神様に裁かれ、退けられているその事実が、死において最も明瞭になってくるから怖い。私たち人間は死のその恐ろしさに気づくことができないくらい神様との関係、絆が緩くなってしまっているような感じがしますが、しかしイエス様は十字架の上で「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と神様に訴えながら死んでいかれました。なぜあなたはわたしを捨てたのか。神様に見捨てられ、関係を断ち切られてしまう死。その恐怖。

加藤常昭先生は『ハイデルベルク信仰問答講話』の中で語っています。「死を本当に恐れることができたのは、罪人として死を本当に恐れることができたのは、主イエス・キリストだけであった」と。「私ども人間は罪人としての死をちゃんと死ねるほどにも、神様との絆がしっかりしているわけではない。」「人間は罪を犯した、神に裁かれているという事実を、その罪の恐ろしさを、その死の恐ろしさを、敏感にいつも恐れているわけではない。」しかし、イエス様は神様に関係を断ち切られてしまう死の本当の恐ろしさをご存じの上で、その裁きとしての死を死んでくださったのです。それはひとえに私たちの罪の贖いのためでした。

マタイによる福音書の 27：51～53 には、イエス様が息を引き取られた時、「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」と、イエス様の十字架の贖い

によって私たち人間と神様との和解が成し遂げられ、私たちの死が滅ぼされたことが象徴的に描かれています。どうしようもない罪人である私たちのために御自分の愛する独り子イエス・キリストに御自分の裁きのすべてを負わせて、私たちを赦してくださった。救ってくださった。永遠の命を与えてくださった。その愛で私たちが変わるのを待っていてくださる。よく十字架というのは神様の義と愛が交わるところだと言われますが、神様はこのように御自分の正義を一つも曲げることなしに、罪人である私たちへの愛を貫いてくださったのです。どうしようもなく罪に走って行ってしまう私たち人間を、イエス様に裁きのすべてを担わせて無償でお赦しになる。その愛で私たちを変えようとしてくださる。このような愛が、ある意味では神様の私たち人間への罰し方であったと言うことができるでしょう。

もしかすると皆さんは罰というと、ひどいことをした人に同じだけの苦しみを味わわせるようなことを意味するとお思いになるかもしれません。「目には目を、歯には歯を」。人間の罪には、それに値するだけの苦しみを負わせるのが罰だと考えておられるのではないでしょうか。しかし神様においては罰をお与えになる時も、その根底にあるのは愛なのです。

ひるがえって、私たちの社会はどうでしょうか。今日本の社会ではどんどん犯罪に対する厳罰化が起きています。時効は廃止され、懲役、有期刑は最長 20 年だったものが 30 年に延び、少年法に関しては対象年齢が引き下げられ、どんどん刑罰が重くなっています。死刑制度に関して言えば、オウム事件以降死刑判決、死刑執行が急激に増えました。何といっても天皇代替わりの際のオウムの 13 人一斉処刑が衝撃的でしたが、ともかく私たち日本の社会では今死刑が増えています。かつては永山基準というものがあり、3 人以上殺した場合に死刑、2 人だと無期懲役という一応の目安があったわけですが、今は完全にそれが崩れました。一人でも「これは赦せない」と社会が怒り、メディアが煽れば死刑判決が普通に出ます。こうした形で刑罰がどんどん重くなっているのが今の私たちの社会です。

そして実はこうした厳罰化の流れは、今日本だけでなく世界中で起きています。2001年にアメリカ同時多発テロがあり、アメリカがタリバンを壊滅させ、次にはイラクに侵攻してフセイン政権を瓦解させました。その結果、イスラム国(IS)が生まれ、IS は世界中に散らばってテロを行いました。今や世界中がテロに怯えています。それに伴い、日本では 1995 年のオウム事件以降起きた、同質のものでまとまり、異質なものを排除しようとするセキュリティ、集団化が今世界中で起き、それに伴って厳罰化が世界中の流れになっているのです。

しかしこのご時世に、刑罰を寛容にしている国があるのを皆さんはご存じでしょうか。北欧です。ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランド。ではなぜこのご時世にこれらの国々が刑罰を寛容にすることができているかというと、鍵になるのはノルウェーです。ノルウェーがまずこれらの国々で最初に寛容化を始めました。キーパーソンはノルウェーの犯罪学者ニルス・クリスティという人です。彼が厳罰主義に反対し、寛容化を唱え、社会復帰を主眼にしたリハビリテーションに重きを置くノルウェー制度の礎を築いて、北欧諸国における受刑者の更生制度に絶大な影響を与えました。

最近教区の集会で、こうしたノルウェーの刑務所の様子を映像で見る機会がありまして、非常に驚かされました。一人ひとりに個室が与えられ、個室の大きな窓には光を採り込むために鉄格子はありません。トイレ、シャワー、冷蔵庫なども完備され、薄型テレビは壁に掛けられているためベッドに寝転がりながらテレビを見ることができます。共有のキッチンと、ソファやコーヒーテーブルを備えたラウンジもあり、面会に来た家族が泊まれる宿泊施設もあります。お昼は刑務官と受刑者が同じテーブルで食事をすることもあります。

ノルウェーの刑務所がこのような環境にしているのは、受刑者が最終的にはちゃんと社会に戻ってほしいからに他なりません。受刑者が厳しい環境で過ごしてひどい扱いを受ければ、そのままひどい人間となって社会に適応できなくなると考えているの

です。なるべく受刑者が普通の生活を送れるよう、環境が整えられていて、出所後にスムーズに社会に適応できるよう促すことで再犯を防ぐのが狙いとされています。

こうした刑務所が普通に市内に建てられているのも驚きでした。日本ではおそらくそうした所に刑務所を作ることは難しいでしょう。たださすがに重大な犯罪を犯した人は島の刑務所に送られます。私が映像で見た刑務所は島全体が刑務所になっていて、150 人が収容されていました。多くは殺人や強盗などを犯した長期受刑者です。

受刑者の多くは経済的、家庭的に恵まれない環境で育ち、十分な教育を受けていません。そこでは文字の読み書きから、望めば大学レベルの授業まで受けることができるようになっていました。受刑者は敷地内に建てられた家にそれぞれ共同で住み、毎日規則正しく生活し、一日数回点呼が行われます。与えられた仕事をこなせば、それ以外の時間は自由に過ごすことができます。敷地内には教会もあり、毎週神父や牧師も訪れます。ここで自分の犯した罪を見つめ直し、心の安定を取り戻すのだそうです。炊事や洗濯など、身の回りのことはすべて自分で自立して行うよう指導され、周りの人達と助け合って暮らすことで社会生活の基本を身に着けます。島には図書館もあり、自由に本を借りて読むことができる。家の外に自由に出ることができるし、なんと刑務官や周りの皆に信頼されると休暇が取れるのです。映像には 3 日間休暇を取って島からオスロ市内の両親が暮らす実家に帰って行った男性の姿が映されていました。こうした休暇制度は、社会や家族との関わりが途切れてしまわないようにノルウェー政府が積極的に進めている取り組みだそうです。これまで戻って来なかった人は一人もいない、受刑者曰く、逃げようとも思わないとのことでした。

こうしたノルウェーには死刑はありません。終身刑もないです。最高刑は禁錮二一年。しかし刑期が満了しても、二つの条件をクリアしないと出所できないことになっています。その一つは帰る家があること。そしてもう一つは、仕事があることです。そして、これら二つがない場合は国がアテンドします。こうした徹底的な取り組みによって、ノルウェーは世界最高レベルの再犯率の低さを達成しました。

ノルウェーの法務省の幹部はこうした寛容化について、「ほとんどの犯罪は 3 つの不足から起きる。一つ目の不足は幼年期の愛情不足。二つ目は成育期の教育の不足。3 つ目は現在の貧困。ほとんどの犯罪はこのどれか、あるいはこれらがリンクして起きる。であれば、罪を犯した人に対して社会は何をすべきかと言えば、この不足を補うことだ。それが刑罰だ」と語っています。

罪には愛を。イエス・キリストの十字架に現された神様の人間に対する罰し方を思わされます。ノルウェーの法務省の幹部のこの言葉を聞いて、私もさすがに考えさせられました。それまでは私も罪と罰ということを考えた時に、罪とは人を害すること、迷惑をかけること、危害を加えること、殺めること、人に苦しみを与えることであり、であれば自分もそれ相応の苦しみを受けることが罰であるとどこかで考えていたように思います。同じことをインタビュアーがノルウェーの法務省の幹部に言うと、「彼らはもう十分苦しんでいる。苦しんでいるからこそ、こんなことをやってしまったのだ。これ以上苦しみを与えても意味がない。むしろどうやって彼らが社会に帰って来られるかを考えるべきだ」という答えが返ってきていました。

ここで一つ言っておかなければなりませんが、ノルウェーも最初からこうだったわけではありません。1970 年代初頭までは結構厳罰の国でした。治安もあまりよくなかった。ところが先程ご紹介したクリスティが舵を取る形で試しに寛容化に舵を切ってみたら治安がどんどん良くなったということで、この方向で間違いないねと、毎年刑罰の寛容化を進めていったのです。そして、それが北欧の他の国に広がって行ったのでした。

しかし、こうしたノルウェーで 2011 年、センセーショナルな事件が起きます。ノルウェー国籍のアンネシュ・ブレイビクという極右思想を持つ人がオスロの政府庁舎前で爆弾を爆発させ 8 人を殺害。その後、マシンガンを持って約 30 キロ離れたウトヤ島という島に行き、そこでキャンプに参加していた政権与党の関係者の子どもたち、まだ 10 代の若者です、これらを襲い、69 人を殺害したのです。ノルウェー政府が移民

を受け入れていることに反対したテロであり、ブレイビクはこのような事件を引き起こすことによって政府の方針を変えさせようとしたのでした。

さすがにこうした事件が起きれば、ノルウェーも死刑制度を復活させて犯人を死刑にするのではないか、厳罰化の流れになるのではないかと騒がれましたが、結果から言うとノルウェーは刑罰の寛容化の流れを変えませんでした。この事件の発生を受けて、当時の法務大臣が首相と共にウタヤ島の現場に駆け付けた時のこんなエピソードが残っています。

血みどろの遺体があちらこちらに横たわる現場検証の場に、どんどんと親たちがフェリーに乗ってやって来ました。そして自分の子どもの遺体を探して、見つけたら抱きしめて泣き叫ぶ。地獄絵図です。そこに花束を持った初老の女性がやって来て、立ち尽くしていました。アンネシュ・ブレイビクの母親です。やがて被害者の母親が、その女性が加害者の母親だと気づいたのでしょう。何人か立ち上がって近づいて行き、取り囲みました。何が起きたか。皆で抱き合って泣いたのです。遺族の一人の母親はブレイビクの母親に向かって泣きながら、「あなたが一番辛いわね」と言ったそうです。

この時に難を逃れた 16 歳の少女は CNN の取材でこう言いました。「一人の人がこれほどの憎しみを見せるのなら、私たちはこれを上回る愛情を見せましょう」と。そして首相はこの言葉を翌々日の国民向けのスピーチに引用しました。そしてあくまでもノルウェーは法を変えず、ブレイビクは先程ご紹介した刑罰の思想で裁かれ、禁固 21 年の判決を受けて今リハビリテーションを受けています。

憎しみもある。厳罰を求める声ももちろんある。しかし厳罰という過激な処分で応えると、ノルウェーの社会が彼の思うようになってしまう。彼の狙いは私たちを変えること。勝ったのはあなたじゃないということを見せようと思った。遺族の、またノルウェーの人々の、それは切実な選択でした。

ひるがえって、私たち日本の社会はどうでしょうか。厳罰化の成果かどうか分かりませんが、確かに日本の犯罪率は減少傾向にあります。しかし、その減少傾向はだんだんと鈍くなってきている。そして何よりも再犯率が圧倒的に悪いです。

ノルウェーでは出所の際、帰る家があること、仕事があることという二つの条件があって、それらが満たされていない時は国がアテンドするということは既に申し上げました。ですからノルウェーでは、出所しても家や仕事に困ることがないわけです。その条件を整えてから出所させる。

しかし日本ではそうなっていません。懲役刑で刑務作業しても、それは労働ではなく懲罰の一種ですから労働基準法は適用されません。ですから、おそらく時給に換算して 20 円とかそんなでしょう。それで何十年と服役し、高齢となって出所する時に、わずかのお金しか渡されない。親戚、知人に縁を切られ、帰る所も仕事もない。高齢で前科持ちで雇ってくれるところもない。アパートを借りたいけれども敷金、礼金だけでお金が無くなってしまう。それでコンビニなどに行って食べ物などを盗んで捕まるという、そういうパターンです。

更生できていない。させていない。そういう環境にしていない。ここは日本の刑事司法の大きな問題だと思います。悪いことをしたやつは痛い目に合わせろという前提で、その人を社会に戻してあげるという発想がないのです。最近にも、殺人事件を犯した当時 19 歳だった少年に「更生の可能性なし」ということで死刑判決が下されたニュースが報道されていましたが、これは被害者のご遺族の感情もあるので無責任なことは言えませんが、しかし本当にそれでよいのだろうかと思わされました。

そのような中にあって、私たち、イエス・キリストの十字架で示された神様の罰し方、またノルウェーの刑事司法の在り方から大きな示唆を与えられていきたいと願います。罰とは何か、改めて考えて、今の社会を神様の御心に沿うものへと変えていきましょう。

祈りましょう。　　――以下、祈祷――